

巻頭言

岡田 康伸

第4集の紀要が発行されて喜ばしいことである。京都文教大学に、日本での初の臨床心理学部が作られ、2008年から始まった。最初の臨床心理学部という自負を持って、日本の臨床心理学の向上になんらかの刺激を与え、日本をリードしていくという意気込みを持って研究に、教育に努めている日々である。このような日常の活動報告として大きな意味を持っているのが紀要であると考えている。紀要は教員によって、支えられ、作られている。今回は本学の先生方の研究方法について考えてみたい。多くの先生方がそのようなことに立脚しているだろうという筆者の考えであり、一律にそうなのではない。

研究方法に関して、日本の臨床心理学では、大きく2つの流れがあるように思う。この研究方法をめぐってももちろん本学にもいろいろな考えの教員がいる。繰り返しになるが、ここにあげるのは筆者が考えていることであり、賛成の教員も反対の教員もいる。敢えてひとつの考えを示し、それをもとに議論していくことになろう。だからこそ、学問が発展していくのであろう。

研究方法については河合隼雄はユング派の考えを基に、自然科学的な方法と共時的な方法の二つに分けて説明した。これは因果律と同時性との対応でもある。原因があって、その結果として何かがおこっていると考ええるものである。一方、原因があるのでなく、偶然に同時にことが起こることもあると考ええる考え方である。こ

れを筆者なりに今の流れと対応させながら、述べると次のようになる。一つめは、臨床心理学は心理学の応用であり、心理学が自然科学的側面を強調するものである。これはエビデンスの必要を強調するもので、確かに必要なことである。しかし、実際に事例に携わっていると、例外的な物がでてくる。事例は個人個人の特徴を示しており、一概に言えないことが特徴といえよう。エビデンスにこだわると、個人の特徴を見失うおそれがある。一方、二つ目はナラティブ「物語る」方法である。個人が自分のこれまでの生活を振り返り、セラピストに話をするとき、その話は個人の思いが込められており、なにかを証明しようとしているのではない。このようなクライアントの話を基に、事例研究をするとき、自然科学的なエビデンスはないにしても、個人から普遍性や一般性を導くことは可能であると思う。ナラティブにもエビデンスはあると思う。要するに、事例を大切にし、そこから知見を得ていこうとする態度が重要になっているのだと思う。

我々の学部の教員は実際の現場での経験をつみ、すなわち、病院や教育研究所などで、ケースに携わりながら、研究に教育に関わっている。このような教員にはたとえエビデンス志向の人もナラティブ的な面をも持っていると思筆者は考えている。また、実際の出来事が基に成っている分、学生にはわかりやすく、意欲をかき立てるものになっていると考えている。